

## スリランカの言語事情と学校英語教科書

林 田 享 子

### Language Choice and School English Textbooks in Sri Lanka

Kyoko Hayashida

#### Abstract

This paper reviews language choice, language policy, and the status of English in Sri Lanka, a former British colony, and describes how they are reflected in a series of national English textbooks used in secondary schools. Some materials in the textbooks are UK-oriented, while others can be attributed to the ethnic composition of the country. The goal of the English proficiency level set by the textbooks is a threshold level, which is in accord with Sri Lanka's language policy. However, the level seems to be adapted to language needs in science and technology for the development of the country. Other features of the textbooks are also described.

#### Key words

Sri Lanka, language policy, English, school textbooks

#### 1. はじめに

本稿では、スリランカの言語事情を言語政策を中心に概観し、その状況を背景とする学校英語教科書の特徴を、教科書の構成、話題、人名、地名の取り扱い方から捉える。日本の英語教育は、近年、特にコミュニケーション能力の向上を強調しているが、スリランカでは国内で英語をコミュニケーションの手段として使用し、英語が第1言語ではない者を対象とする英語教育が行われている。したがって、スリランカの英語教科書のあり方が、日本の英語教科書のあり方にも何らかの示唆を与えてくれるものと考えられる。

スリランカはシンハラ語とタミル語を主要言語とする多民族国家である。その正式名称は、72年憲法の制定時に「セイロン」から「スリランカ共和国」に改められ、さらに78年憲法制定時に現在の名称「スリランカ民主主義共和国」に変更された。ここでは、現在の通称「スリランカ」を一貫して用いる。

#### 2. 言語事情

##### 2.1. 植民地支配の概略：1505年～1900年<sup>(1)</sup>

西欧によるスリランカ植民地支配の歴史は、1948年にイギリスから独立するまで、約4世紀半

にも及ぶ。まずポルトガルによる支配が1505年～1658年、次にオランダによる支配が1658年～1796年、その後はイギリスによる支配が独立時まで続いた。この3カ国の中で、イギリスがスリランカ社会に最も大きな影響を与えている。

ポルトガルとオランダは、支配の目的が象牙やシナモン等のスリランカの産物を持ち帰ることにあった。したがって、この両国が支配した地域はスリランカ全土ではなく通商に必要な海岸線沿いであり、中央高地に住むシンハラ族は自らの伝統と文化を保持し続けることができた。言語的には、ポルトガルの支配下では、ローマン・カトリックへの改宗を強力に推進する政策によって、一部スリランカ人の間でポルトガルの人名を用いる者やその言語を習得する者も現れている(杉本 38)。一方、オランダはプロテスタントの布教活動を行ったが、宣教師の数は僅かであり、現地の言語に精通した者も少なかったという。

次に支配権を握ったイギリスは、中央高地を含むスリランカ全土を支配下に置き、排他的所有権の概念のないスリランカへの土地登記制度の導入、単一の行政・司法制度の適用など、伝統的な生活や価値観にも影響を及ぼす政策を施行した。また、プランテーション農業を開始して、スリランカ経済の新たな支柱を築いている。しかし、1840年代以降、その農場に必要な安価な労働力として東インドのタミル人を多数投入したことが、その後、スリランカの深刻な民族問題の一つに発展した(Dharmadasa<sup>a</sup> 228-31)。

イギリスの支配下では、要職を占める少数のイギリス人を頂点として、英語教育を受けたスリランカ人がこれを支え、下層部にその他大勢のスリランカ人が位置するという社会構造が確立された。英語はスリランカ人にとって富と成功への鍵であった。ただし、その習得のチャンスは授業料の高い私立学校に行けるだけの財政的余裕のある者に限定された。しかし、1900年代には、英語を媒体として西欧の思想に触れたスリランカ人エリート層の間で、独立の気運が高まってくることになる。

## 2.2. 言語政策：1900年代<sup>(2)</sup>

### 2.2.1. 公用語政策

#### 2.2.1.1. 独立前

公用語を英語から現地の言語に移行させる動きは、1920年代に始まる。この頃から、言語問題が、スリランカ社会において常に改革を要する問題として取り上げられるようになる。

1925年頃に、タミル系の多い北部州ジャフナの青年グループを中心に *Swabasha* 運動が開始された。*Swabasha* とは、パーリー語あるいはサンスクリット語で国語を意味する。この運動の目的は、英語で教育を受けた者だけが社会的特権を享受する状況に抗議し、国内の言語を国語として推進することにある。一流の英語系中学校の教師たちもこの運動に加わり、スリランカにおける近代教育制度の確立を目指す動きも活発になっていった。1935年には国家議会が教授言語として現地語の使用を求める覚書を発行している。また、インドに倣って、国内の言語であるシンハラ語とタミル語を公用語にする案や、両言語を国家議会、行政、裁判所における使用言語にする案が検討された。

しかし、40年代に入ると、言語問題はそれまでとは異なった展開を見せ始める。43年には教育条例に関する検討結果の報告書において、母語を教授言語にすること、また、シンハラ語とタミル語を公用語にすることが提案された。これを受けて、同年に、公用語・国語法案が国家議会に提出された。しかし、この法案ではタミル語が削除されていたことが問題になり、議論の末、44

年にシンハラ語とタミル語の両言語を公用語とする公用語法案が可決された。その実施に向けて設置された特別委員会は、46年に、英語から両言語への移行期間を10年とする提言を行っている。しかし、シンハラ仏教徒の間ではタミル語を公用語にすることに反対する動きが活発化した。

言語問題は、1900年代当初から30年代まで、植民地支配国の言語である「英語」対「国内の言語」の構図で捉えられてきた。しかし、40年代には、国内の多数派言語「シンハラ語」対少数派言語「タミル語」という構図に置き換わっている。当初よりタミル語を公用語とする案を積極的に支持する者は少数であり、タミル系以外の少数派民族グループは見解を控える一方、高級官僚やエリート層の間ではこの問題への関心が欠如していたという。

### 2.2.1.2. 独立以降：1948年～

スリランカは1948年に独立を達成した。その時点では、シンハラ語とタミル語の両言語を公用語とする独立前の言語政策が有効であったと考えられる。51年には、公用語法実施特別委員会の提言を受けて「国語委員会」が設置された。しかし、5回の中間報告を経て53年に提出された最終報告書には、「英語に取り替える言語はシンハラ語だけの方が取替えが容易であろう」という委員長のコメントが添えられていた。

その後、政府は政治的思惑から方針を覆し、55年に「シンハラ語オンリー」政策を宣言する。さらに、56年には「シンハラ語オンリー」の公用語法案を可決し、英語からシンハラ語への移行期間を5年間とした。この法案の文面は非常に簡潔であり付随規定はない。これは、反対派の攻撃をかわし、その政策に柔軟性をもたせるためであったという。しかし、タミル系はこの公用語法が政府の同化政策であるとの疑念を強め、タミル語を公用語にすることに加え、タミル系の多い北部州と東部州の自律性を可能にする連邦制とプランテーション労働者として渡来した南インド出身のタミル人の市民権を要求した。その結果、政府は58年にタミル語特別法案を議会に提出する。しかし、59年に首相が暗殺され、その可決は66年まで見送られた。

72年に制定された新憲法では、公用語に関して、56年公用語法と66年タミル語特別法の内容を踏襲し、基本的にシンハラ語オンリーの方針が明記された。しかし、タミル系の反対に遭い、78年と88年の憲法修正法において、公用語としてシンハラ語とタミル語を同等に明記し、公用語使用に関するその他の規定も州の言語事情に合わせて両言語の扱いがより公平になるような表現に改められた。この公用語法を実施、監督していくために、1991年には公用語委員会が設置されている。

### 2.2.2. 英語の地位

言語問題が取り沙汰されるようになった1900年代以降、英語は、法律上、常に取り替えられるべき言語であった。しかし、44年公用語法は公用語を英語から国内の言語に移行させる期間として10年を目安とし、その期間が経過した56年の公用語法はさらに5年の期間を設定している。国内で英語が担っている事実上の役割は、公然と評価されてはならない事柄であった。1960年代には、全公立学校で教授言語として英語を用いることが禁止されている。また、72年憲法は、「シンハラ語あるいはタミル語以外の言語 (a language other than Sinhara or Tamil)」という表現を用い、その言語名に直接言及することを避けた。しかし、この状況は1978年以降に変化する。

78年憲法修正法の第18条3項は「シンハラ語とタミル語の両言語を橋渡しする役割を担った言語 (a link language)」と明記し、独立以降、初めて英語に明確な位置付けを与えた。さらに、88年修正法によって、78年修正法で依然としてあいまいな表現を用いていた箇所も修正された。

一方、政府は78年憲法修正の前年度に外国資本に門戸を開いた。その結果、英語は私企業への

就職に有利な条件になり、英語教育に対する関心が再び高まっている。その状況を背景として、88年には初等と中等の一部で教授言語としての英語使用が認められた (Lloyd)。

2000年8月に司法省に提出された新憲法案では、公用語はシンハラ語とタミル語、国語はその両言語と英語であると明記されている。これは、英語が事実上重要な役割を担ってきた状況を単に追認するだけでなく、その役割を積極的に推進する方針への転換を示唆している (OWS)。

### 2.3. 民族構成比と使用言語<sup>(3)</sup>

スリランカでは、全国規模の人口調査は1981年を最後に行われていない(EFA)。1980年代以降、シンハラ系とタミル系の闘争が激化しているため、タミル系が多数を占める北部州や東部州の調査は困難な状況にある。したがって、スリランカ政府は、その後、入手可能なデータに基づく推定値を発表している。1981年度以降の民族構成比がほぼ同値であるのはそのためであろう。

1981年度の民族構成比は、シンハラ系：74.0%、タミル系：18.2%、スリランカ・ムーア系：7.0%、マレー系：0.3%、バーガー／ユーラシアン系：0.3%、その他：0.2%である<sup>(4)</sup>。タミル系の数値は、プランテーション農業の労働力として南インドから渡来したインド・タミルと以前からスリランカに居住するスリランカ・タミルを合わせた数値である。また、バーガー系は主にシンハラ人とヨーロッパ人との間に生まれた混血の子孫であり、スリランカ最古の民族と見られるヴェッターはその他の範疇に含まれる。独立前の1946年からの推移は、シンハラ系が69.4%から緩やかに上昇し、タミル系は22.7%から徐々に減少している。

ただし、民族構成比は地域によって異なる。1981年度の統計によると、シンハラ系が全9州中7州において過半数を占め、その州内の地区によっては全人口の94%以上を占める。一方、北部州では、タミル系が全4地区で50%以上、そのうち2地区では80%以上を占め、シンハラ系はジャフナで0.6%、多い地区でも16.6%に過ぎない。また、東部州では1地区でタミル系が70.9%を占め、1地区ではムーア系が最も多い。中部州の1地区でもインド・タミル系が47.3%で最も多く、スリランカ・タミル系を合わせると60%を超える。

使用言語は民族別に分かれる傾向にある (Ara 169-70)。全般的に、シンハラ系はシンハラ語、タミル系はタミル語、ムーア系はタミル語を用いている。したがって、北部州と東部州ではタミル語使用者が多数を占める。また、シンハラ語とタミル語のバイリンガルは、少数派が多数派の言語を習得する方が経済的にも社会的にも有利であることからタミル系に多い。一方、英語話者は全人口の約10%である。この数値に第2言語としての英語使用者の数値を加えるとさらにその割合は増す。

しかし、言語使用の実情は憲法上の規定と必ずしも一致しない (De Silva 34-6)。56年シンハラ語オンリー公用語法の制定後も、貨幣、切手、道路標識、公式文書、ラジオ放送等において、シンハラ語、タミル語、英語の3言語が使用され続けている。また、学校教育では30年代から40年代に教授言語としてシンハラ語とタミル語を使用するようになったが、その状況は変わることなく、60年代には大学でも使用するようになっている。ただし、学校教育で習得される英語力に関しては、独立後の公用語政策による著しい低下が報告されている (Lloyd: Fernando<sup>a</sup> 185-204)<sup>(5)</sup>。

印刷物の言語別状況に関しては、1997年における新聞の種類数が、シンハラ語：109、タミル語：33、英語：23、バイリンガル：4である。1992年からいずれも2.0~2.6倍に増加している。最も増加率が高いのは英字新聞である。また、タイトル別図書数は、1992年から1996年の間に、シン

ハラ語とタミル語が1.2倍に増加し、英語は0.84倍に減少している（下の表を参照）。ただし、出版部数では、シンハラ語が1.25倍、英語が1.2倍に増加し、タミル語が0.82倍に減少している。また、2言語以上の言語で出版されたタイトル別図書数は0.79倍に減少しているが、図書部数では3.6倍にも増加している。

	タイトル別冊数		部数	
	1992年	1996年	1992年	1996年
(総冊/部数)	(4,225)	(4,115)	(18,600,854)	(28,176,741)
シンハラ語	33.9	42.0	52.2	43.9
タミル語	8.4	10.2	17.1	9.3
英語	21.7	18.7	14.8	11.4
2言語以上の言語	35.7	29.1	14.8	35.4

### 3. 教育制度<sup>(6)</sup>

スリランカでは教育の普及率が高く、識字率は90%を超える。教育行政は中央集権制度をとり、87年憲法修正以降、州教育省を設置して地方の参画を促す方向に向かっている (EFA)。

現行の学校制度は1950年の教育白書に基づいている。学校の種類は公立学校とその他の2種類に大別される。後者には、私立学校、インターナショナル・スクール、仏教寺院に付属する主に僧侶養成のための学校等が含まれる。就学開始年齢は5歳で、初等が第1～5学年の5年間、中等が第6～11学年の6年間、コレッジイトが第12・13学年の2年間である。中等はそれぞれ3年間の前期と後期に分かれている。中等終了時には教育普通レベル終了試験 (the General Certificate of Education Ordinary-level)、コレッジイト終了時には教育上級レベル終了試験 (the General Certificate of Education Advanced-level) が行われ、合格者には修了証が授与される。後者の合格は大学入学の条件である。

義務教育に関しては、1997年に規約 (regulation) によって、5～14歳の9年間と定められた。しかし、それまでにスリランカはアジアで上位を占める就学率を達成している。1994年時で30歳以上の者の最終学歴は、初等：25.2%、中等：40.2%、教育普通レベル修了試験合格者：17.2%、教育上級レベル修了試験合格者：5.9%、高等：0.4%である (DCS)。また、1995年度の総在学率は、初等：113%、中等：75%、大学：5%である (ユネスコ文化統計年鑑1999 349)。

学年暦は1～12月で、3学期に分かれている。年間の授業日数は190日以上である。1日の授業時間は第1～3学年：4時間、第4学年～：5.5時間である。1単位授業時間は初等：30分、中等：40分である\*。カリキュラムは第1学年から11学年まで国定カリキュラムであり、教科書も国定教科書である。教授言語は初等と中等でシンハラ語またはタミル語、高等レベルでは特に科学と医学の分野で英語が用いられている。

1945年以降、学校教育は幼稚園から大学まで無償であり、教科書も第11学年まで無償で支給されている。さらに、1989年以降には、学校給食も無償で提供されている。

教員の資格は、教育上級レベル資格試験の合格が条件である。しかし、実際には、初等と中等の両レベルで、教育普通レベル資格試験に合格し教員養成の訓練を受けた者が採用されている\*。1997年時の初等教員有資格者は55.2%である。

英語科目の導入学年は、「体育」、「初級科学」と共に第4学年であるが、第3学年の学校もある\*。週当たりの授業時間数は初等：5単位時間、中等：5～6単位時間である。他教科の時間数と比較すると、初等では第1言語と数学が最も多く、次に英語が多い。また、中等の高学年では数学と科学の時間数が最も多く、次に第1言語と英語で、両科目の時間数はほぼ同数か、第1言語の方が1単位時間多い。1クラスの人数は、約45名という学校もある\*。

外国語科目は初等科目と中等科目の中には含まれていない。しかし、ごく少数の学校が第12学年で選択科目としてフランス語を教えているという\*。

1997年の教育改革案では、英語教育の強化が主要項目の一つである(EFA)。そのために、英語科目の導入学年はほぼ従来通りの第3・4学年として、第1・2学年で母語を混用した口頭英語を導入することが考えられている(Karunasinghe & Ganasundara)<sup>(7)</sup>。また、第5学年では第2国語の導入も提案されている。

#### 4. 国定教科書 *English Every Day*

##### 4.1. 構成

国定英語教科書 *English Every Day* は全5分冊のシリーズ本である。各分冊は第7学年から第11学年で使用されている。その作成にあたっては、従来の文法中心の内容からコミュニケーションを重視した内容に変えるために、教育の現場を巻き込んだ2年間の検討が行われ、1988/89年以降、全学年で使用されている(Mosback 18-9)。

全文冊ともにサイズはA4であり、冒頭の頁にアルファベット表記によるシンハラ語の国歌を記している。教科書作成者の民族別構成は、その名前から判別すると、イギリス人：2名、イスラム系：1名、タミル系もしくはシンハラ系：1名、シンハラ系：12名である。各分冊の出版元、印刷所、出版年度と頁数の構成は次の通りである。

教科書	<i>English Every Day</i> , Book 1~5 (Year 7~11), Pupil's Book				
出版元	the Division of English Education of the Curriculum, Development Centre, the Educational Publications Department, Sri Lanka				
印刷所	the Department of Government Printing, Sri Lanka				

	初版	入手本 再販	学年	本文(頁)	付録(頁)
Book 1	1984	1993	7	95	28
Book 2	1985	(初版)	8	94	10
Book 3	1985	1993	9	103	10
Book 4	1986	1993	10	108	10
Book 5	1987	1998	11	93	10

本文はどの分冊も8単元から構成されている。1単元の頁数は、単元の序列や学年の高低とは関わりなく10～15頁である。

各単元は複数のセクションに分かれ、おおよそ次のような枠組みで構成されている。

#### 各単元の枠組み

1. 「ロールプレイ」の対話文
2. 「Finding Out」
3. 順不同：「語句学習 (Word Study)」, 「詩・韻文」, 「リスニング」, 「ライティング」,  
「文法練習 (Grammar in Action)」, 「日常会話表現」,  
「Learning Together/Communicative Activities」等
4. 「文法の説明とまとめ」

「Finding Out」と「Learning Together/Communicative Activities (以後、LT/CA と記す)」は、単元によって複数の箇所に登場する。また、順不同の箇所には分冊によって異なった種類のセクションが登場する。その種類の相違は学習レベルの相違に対応している。

「語句学習」では、単元のテーマに関連させて、日常生活で用いる単語、たとえば家具、食品、乗り物、体の各部分、職業等の語句を、短時間で大量に学習させることがねらいである (Mosback 20)。このセクションをシリーズ最初の2分冊の全単元が設け、第3分冊と第4分冊の8単元中4単元が設けている。一方、第4分冊では、新たに「Language Study」が加わり、文章にまとまりをもたせる代名詞の機能、接辞、同義語、反義語など、単に単語を覚える以上の学習内容を取り上げている。また、「LT/CA」が第3～5分冊、「リーディング」が第4～5分冊、「ディスカッション」が第5分冊に登場している。

付録は、「各単元の文法のまとめ」、「不規則動詞の表」、「語彙表」、「各単元のリスニングのスク립ト」から構成されている。ただし、第3～5分冊では「各単元の文法のまとめ」は本文中に設けられている。

「語彙表」の項目は単語と接辞に分かれている。分冊間で重複する項目はない。各分冊の掲載単語数は約900～1070語である。その中には、動詞の過去形・過去分詞形・3人称単数現在形で語尾の綴りが変化したもの、短縮形、代名詞の格変化形、名詞の不規則複数形が含まれている。第1分冊の項目数が最も多いのは、第7学年以前の全ての既習語彙を項目としているからであろう。その表には不定冠詞の a, an も含まれている。

#### 4.2. 習得目標の英語力

監修者の Mosback によれば、シリーズが習得目標とする英語力は、ヨーロッパ議会 (the Council of Europe) が提唱する日常のコミュニケーションに最低限必要な threshold level の英語力である (22, 24)。第1分冊の目標は waystage English (英語力ゼロと threshold level のほぼ中間に位置する英語力) と threshold level の間の英語力であり、最終分冊を終える第11学年終了時に threshold level の英語力を習得することを意図している。シラバスは基本的には概念・機能シラバスであるが、文法の系統だった習得も重視した多面的シラバスが考えられている。

各単元は、全体的な傾向として、複数の言語技能を併用する言語活動を要求している。見出しそのものがこの言語活動を意味する「LT/CA」のセクションは、単元によって複数回登場している。また、「Finding Out」では、主にリーディング教材を読んで、書く・話す等の言語活動を要求している。このセクションは全単元に登場する。さらに、見出しが特定の言語技能名であっ

でも、「リスニング」では聞き取った話を参考に自分の話を創作し発表する、「ライティング」では短文を読んで書く等の作業を課している。

4 言語技能のうち、聞く、読む、書くの3言語技能は、単元を構成するセクションの見出しになっている。したがって、話す技能は、授業で随時用いながら習得することが前提である。また、言語技能別に細分化した「読む技能」の指導は第10学年以降に行われる。「リーディング」のセクションは第4分冊から登場し、文学作品を取り上げた場合には解説を添えている。

### 4.3. 話題の取り扱い

単元を構成する複数のセクションの話題は必ずしも同一ではない。しかし、その内容は、全体的に同一のテーマに沿っているか、できるだけ相互に関連性があるように構成されている。たとえば、後者に該当する第1分冊第2単元の場合、「ロールプレイ」はイギリス人の Anne がコロomboの飛行場に到着した直後の対話、次に「Finding Out」が Anne のスリランカ訪問の目的である観光と関連させて、観光地のイタリア・ベニスと国内のウバ州・州都の紹介文を取り上げている。さらに、「語句学習」では Anne の友人の Padmini が食品店で買い物をするという状況を設定し、「リスニング」では今度は Padmini の母親が買い物に行くという状況設定で店への道順を聞き取らせている。

以下、話題を国内の文化、国外の特定の国／文化、科学関連の話題、世界的視点の話題に分けて、その取り扱いの特徴を述べる<sup>(8)</sup>。

#### 4.3.1. ロールプレイ：対話文

主な登場人物はスリランカに住む Padmini とその弟の Ravi、そして、Padmini がロンドン留学時に共に看護学を学んだイギリス人の Anne Grant である。教材として用いる対話文の話題は背景と大いに関係する。対話の背景は、第1～4分冊はスリランカ国内、第5分冊はイギリスである。各分冊の対話文の状況設定を次に示した。

#### 「ロールプレイ」の状況設定

第1～3分冊 第7～9学年：背景はスリランカ（話題は国内中心）

第1分冊：Ravi が Anne を飛行場で出迎えて、コロombo市内の食堂で Padmini と待ち合わせ、それから家へ。居間で両親を交えて対話。

第2分冊：Anne のスリランカ観光と滞在先の Padmini の家。

第3分冊：Anne のスリランカ滞在と飛行場への見送り。

第4分冊 第10学年：背景はスリランカ（話題は8単元中5単元が国外関連）

登場人物は Padmini と Ravi を中心とする国内の人々で外国人も登場。状況設定は、イギリスに帰国した Anne から手紙が届く、その返事を出す、市内のティールームで外国人教授と話す、自宅のTVの故障など多様。

第5分冊 第11学年：背景はロンドン（話題はロンドン観光に関連）

第1単元では Padmini がロンドンの国際会議に出席するために飛行機の切符を買う。第2単元から舞台はロンドンに移行し、ロンドン観光。最後の単元では Anne とその家族が Padmini を飛行場で見送った後、車上ねらいに会う。

話題は、第1～3分冊がその状況設定に沿った主にスリランカ国内の話題、第4分冊が国内、国外、国際郵便料金等の国際的な話題、第5分冊が主にロンドン観光の話題である。



### 4.3.2. その他のセクション

国内か国外かに関わりなく、数学と科学関連の話題が多い。どの分冊もこの話題を単元総数の半数以上が取り上げている。しかも、ラジオやTVの発明者のように、科学の領域における貢献者を話題にするセクションもあるが、全体として、科学的な仕組みや過程そのものを直接の話題にする傾向が強い。第1分冊では、7枚の絵の順に石鹼の分子が衣類の汚れを落とす過程を科学的に説明する文章が登場し、その後に石鹼水を使った実験の手順が記されている。また、算数計算と幾何学の図形も取り上げられている。この領域の各分冊の話題は以下の通りである。

#### 数学・科学関連の話題

第1分冊：1(+3)\*

3\*\* 石鹼が衣類の汚れを落とす化学的過程(4:LT 算数計算, 5:L\*\*\*車の時速, 6:L幾何学図形)

第2分冊：3(+2)

1 栄養学, 2 電気・飛行・心の科学, 3 潜水服・潜水, 4 健康の科学

(5 LT:算数計算, 8 LT:バラの花にインクを吸わせて色の変化を見る科学実験)

第3分冊：4

2 石油精製の過程, (L:静電気), 3 磁化(W:地震の強度, LT:表・グラフの読み方と作り方), 4 火山活性化の仕組み(W:動植物の天気予知の科学), 8 飛行機の構造と風力への対応・道路用夜間反射装置

第4分冊：3(+1)

3 体内における食物吸収の仕組み, 5 電話による声の送受信(R:電話の発明者), 6 TV映像の科学・TVとラジオの発明者(R:カメラの構造と仕組み), 7 (W:表とグラフの書き方・読み方)

第5分冊：4

2 スリランカ周辺のさんご礁の生態(R:地球の歴史), 4 死後の生命の科学, 5 ラジオ放送の電波と周波(見出し無し:ロシアとUSの放送網競争とその比較, W:ロシアとUSのロケット打ち上げ競争の歴史, L:ラジオの周波数), 6 コンピューター・ワープロの仕組み(見出し無し:コンピューターのバイナリー・コードによる認識装置)

\* この話題を取り上げる単元総数:「Finding Out」(+その他のセクションのみの数)

\*\* 単元の番号

\*\*\* L:リスニング, 後出の省略記号はW:ライティング, R:リーディング

数学と科学関連以外では、国内の話題は、日常生活の文化、地理、人口統計、観光、スポーツ、ジプシーの現代の生活等が随所で取り上げられている。一方、国外の話題は、以下に示したように、中等後期の第4分冊と第5分冊に多い。また、世界的視点の話題は、全文冊中4単元が取り上げているに過ぎず、その3単元が第4分冊と第5分冊の単元である。中等後期では、多数の国や文化を同時に取り上げるセクションも増加する。

#### 国外の話題

第1分冊 1 Rhyme: Red Indian

8 FO:アメリカ独立記念日の花火とイギリスの記念日の花火

第2分冊 2 W:タイのポンガル祭り

5 FO:木の伐採と植林の必要性と生態, L:動物・環境保護(パンダと竹林/中国)

8 FO:スウェーデンの光の祭りと聖ルシア

第3分冊 1 FO:日本の被服の歴史(着物から洋服へ, 着物の着方)

- 第4分冊
- 4 FO: 北半球の四季, L: 世界各地の挨拶 (ジェスチャー)
- 1 FO: 船乗りシンドバットの航路を辿った男 (スリランカはその航路の経由地)  
CA: 14カ国の言語による挨拶
- 3 GR: 世界の時間帯
- 6 R: TV 人類・動物愛 (人名救助/ロンドン, 参考: イルカ救助・警察馬の死/国内)
- 7 FO: 3時期のアジアの人口
- 第5分冊
- 8 FO・L・W・WS: 絶滅寸前の動物, R: 汚染 (酸性雨), CA: WWF への情報請求の手紙
- 1 LT: 多数の外国為替レート・旅行した国について (例示国: 日本・ロシア・スペイン・パキスタン), L: 英仏間の海底トンネル建設に対する賛否両論
- 3 W: タージ・マハール, 新聞の海外文通希望欄の4人の紹介文 (ベルギー, スペイン, モロッコ, インド, エチオピア), ヨーロッパへの旅行 (世界の航空会社略記号と飛行機の時刻表)
- 5 FO: ロシア・イギリス・US の放送網の力関係, R: ロシアとUS の放送網競争と比較
- 6 D: 銀行員からバングラデシュでのボランティアに職業換えした英国人
- 8 L: イギリスの不可解な法律

(注) 分冊の後の数値は単元, FO: Finding Out, GR: Grammar Review, D: Discussion

網掛けは複数の国もしくは文化が話題, 枠囲いは世界的視点の話題

#### 4.4. 固有名詞の取り扱い

人名, 地名, 言語名を国内と国外に分け, 人名に関しては, さらに偉人・有名人とその他の人名に分けて, その取り扱いの特徴を述べる。

##### 4.4.1. 偉人・有名人の名前

国内の偉人・有名人では, 独立時の貢献者 (シンハラ, タミル, イスラムの各民族系1名), 水泳選手, 遺跡発見者, シンハラの前王が登場する。また, 文学者も詩の出典を記した箇所が登場している。

国外の偉人・有名人は, 文学作品の解説に記された作者名も含めると, 70名が登場している。その中の61名は科学者, 文学者, 歴史上の前王/政治家のいずれかに該当する。残り9名は以下の人物である。

イギリス: 議事堂爆破を企てた Guy Fawkes, シンドバッドが航海した海路を辿った Tim Severin, スリランカの教育関係者の Marie Museaus

アメリカ: アメリカを発見したコロンブス, ポップ歌手のステイービー・ワンダー

中国: 映画俳優の Bruce Lee

スウェーデン: 聖ルシア

ギリシャ: 彫刻家のフェイディアス

イタリア: 歴史家の Pliny the Elder

英語圏の5名はアメリカ人とイギリス人であり, その領域は多様である。この5名と比較すると, 残り4名中3名の生存年代は極めて古い。

分冊別では, 文学者と科学者が全5分冊に登場しているのに対して, 歴史上の前王/政治家は第4分冊から登場し, その多くが第5分冊に登場している。その出身地域と国は次の通りである。

## 3 領域の偉人・有名人

地域	国	文学者	科学者	歴史上の王／政治家
英語圏	アメリカ	1	6	1
	イギリス	20	3	3
アジア	日本		1	
	インド	1	1	2
	トルコ	(1)*		1
ヨーロッパ	スイス		2	
	フランス		1	
	イタリア		1	1
	ロシア		4	2
	ギリシャ	1		1
	スペイン	1		
アフリカ	エジプト			2
不明		1	3	
合計		25+(1)	22	13

\*作品は取り上げられているが、その作者名は明記されていない

不明者は出自国を確認できなかった人物、その名前と文脈から判断するとすべて欧米圏の人物である

文学者はイギリス人が圧倒的多数を占める。また、科学者のほとんどが英語圏とヨーロッパの人物である。その中で人数が多いアメリカ人とロシア人には、それぞれ3名の宇宙飛行士が含まれている。歴史上の王／政治家は4つの地域に分散しているが、英語圏と比較して、その他の地域は古い時代の話に登場する人物が多い。

地域別ではアジアは少数である。その半数以上を占めるインドは、スリランカと歴史的に関わりの深い国である。また、トルコはスリランカと同様に国内にイスラム系住民を擁する国である。作者名は記されていないが、イスラム詩人であるメブラーナ・ルーミーの「盲人と象」も取り上げられている。また、表ではイギリスの数値に含まれるリー・ハントの作品は「Abou Ben Adhem」である。この詩のタイトルは、イスラム人と目される人物の名前であり、どの宗教も人類愛を信奉することを高く評価する解説が添えられている。

## 4.4.2. その他の人名

国籍を明示していない名前が圧倒的に多い。その殆どがスリランカ人の名前である。民族別ではシンハラ系の名前が多数を占めるが、シンハラ系とタミル系に共通する名前も含まれている。イスラム系の名前も僅かではあるが登場している。その他は英語圏の人名である。ただし、シンハラ系とタミル系の間では、通常英語圏の人名と見なされる名前のいくつかが用いられている。教科書に登場した人名では、David, Cyril, John, Mary, Peter, Frances, Christopher, Marie がこれに該当する<sup>(9)</sup>。

国籍を明示している場合には、その多くがイギリス人である。その他には、英語圏のアメリカ：2名、ヨーロッパのドイツ、フランス、ノルウェー、ロシア、スペイン：各1名、アジアがタイ：2名、日本とパキスタン：各1名である。数少ないアジアの人名に日本人名が含まれているが、

その名前は日本人らしからぬ名前の Nakoya である。一方、英語圏の名前であるとだけ明記している名前もある。

なお、次のように、シンハラ語の知識がない者には人名と思われる単語が英文中で用いられていた。そのいずれも血縁関係を意味するシンハラ語の単語である<sup>(10)</sup>。

分冊 2・単元 3 L : I was able to buy a little purse for Amma (=Aunt) and a hanky for my sister.

分冊 4・単元 8 GA : Move up a bit, Akki (=Sister).

(下線と括弧は筆者の加筆)

#### 4.4.3. 地名

アフリカ大陸を除く広範囲の国々が登場している。全分冊に登場する国は、英語圏ではイギリスとアメリカ、アジアではインドと日本である。また、登場分冊数が多い国はアジアとヨーロッパに集中しており、両地域の登場国数はほぼ同数である。一方、アフリカと中南米は、3分冊にその地域名だけが登場しており、1分冊では全く用いられていない。地域別・国別の登場分冊数を以下に示した。

##### 2分冊数以上の登場国

文冊数	アジア	英語圏	ヨーロッパ	中東	中南米	アフリカ
5	インド, 日本(1)*	イギリス, アメリカ	イタリア			
4	シンガポール		フランス, ロシア			
3	中国, パキスタン(1), マレーシア(2)	オーストラリア	ギリシャ(1), スイス(1), ドイツ(1),	トルコ(1)		
2	タイ(1), ネパール(1), フィリピン(1)	カナダ(1), NZ	アイスランド, スウェーデン(1)		ブラジル(2), メキシコ(1)	エジプト

\* ( ) 内の数値は複数の国を列挙した箇所に登場している分冊数

##### 1分冊のみの登場国

アフリカ：エチオピア

アジア：インドネシア、バングラデシュ、(モルジブ)\*、(ビルマ)、(グアム)、

ヨーロッパ：デンマーク、ノルウェー、フィンランド、ブルガリア、ラトビア、(オランダ)、(スペイン)

中東：イスラエル、イラク、オマーン、サウジアラビア、シリア (イラン)、(バーレーン)

\* ( ) 内の国は複数の国を列挙した箇所に登場

#### 4.4.4. 言語名

国内の言語に関しては、先に教科書の冒頭にシンハラ語の国歌が記されていることを述べた。本文中では、求人広告と求職用の簡略な履歴書を例示した中で、資格／特技の一つとして登場する。第3分冊の1単元は、求人広告の5例中2例と求職用の履歴書の8例中1例においてタミル語と英語を併記している。英語は、残り3例中1例と7例中5例にも登場している。その他の言語は、それぞれ1例がフランス語とドイツ語を記している。また、第5分冊の1単元でも同種の例示があり、英語が9例中4例に登場している。シンハラ語の記載がないのは、学習者がシンハラ語を習得していることが前提となっているからであろう。

外国語では、複数の言語を列挙している場合を除くと、フランス語とドイツ語が2分冊、ギリ

シャ語が1分冊に登場している。列挙した箇所も含めると、3言語ともにその数がさらに1分冊増え、その他にも次のような多様な言語が登場している。

分冊数	アジア・アフリカ系	ヨーロッパ系
2	日本語	ロシア語
1	アラビア語, ウルドゥー語, タイ語 トルコ語, ヒンディー語	イタリア語, スウェーデン語, スペイン語, デンマーク語

## 5. 総括：言語事情を背景とする教科書の特徴

この教科書シリーズには国内の言語事情の影響が大きく表れている。ロールプレイの主要人物と背景、文学作品、人名、地名の取り扱いにはイギリス偏向の傾向が強い。また、文学作品、人名、言語の取り扱いには国内の民族構成やその比率が反映されている。民族統合の問題を意識してか、民族構成比では上位の民族系の人物を意識的に取り上げる箇所がある一方、人名の取り扱いや言語の扱いは、学習者の多数がシンハラ語使用者であることを前提とする特徴が表れている。

また、シリーズの習得目標は、英語はシンハラ系とタミル系の橋渡しをするための言語であると定める憲法上の規定に合致する。その目標の英語力は、日常の社会生活を営む上で最低限必要な threshold level の英語力である。つまり、公用語はシンハラ語とタミル語であり、日常生活では英語が用いられていない状況が前提として考えられているのである。実際、監修者の Mosback は、「日常会話表現」のセクションについて、特にスリランカが観光国であることが英語学習の良い動機づけになると述べている<sup>(21)</sup>。しかし、その一方では、ごく僅かではあるが、シンハラ語混じりの英文が教科書にまで登場している。これは、独立前に端を発する公用語政策にも係らず、英語が国内のコミュニケーションにおいて使用され続けてきた状況を示唆している。

一方、科学領域における英語使用を意図した傾向が強く表れている。数学・科学の領域の話題が数多く取り上げられている。これは、国定カリキュラムにおいて数学と科学が主要科目であることと対応する。数学と科学を重視する傾向は、教科書がゲーム用に提示している言語材料にも表れている。第2分冊第5单元では、6人の名前と好きな科目等を提示し、人物探しゲームを行わせている。その科目は英語、数学、科学である。

しかし、その取り上げ方は、実際に英語で科学的な内容を取り扱うために必要な英語力の習得が意図されているかのようである。具体的に数学や科学の内容に踏み込んだ方法を取り、学年が上昇するに連れてさらに高度な内容を取り扱っている。このシリーズの学習によって習得可能な英語力は、threshold level 以上の英語力ではないだろうか。これは、スリランカ国内における言語事情が加味された結果とも考えられる。

多くの者にとっては threshold level の英語力の習得が妥当な目標であっても、ごく少数の者にはそれ以上の英語力の習得が必要である。スリランカの大学では、科学の領域の授業は英語で授業が行われている。中等修了後、大学進学希望者は、さらに2年間の教育を受ける。しかし、大学入学までに習得した英語力では不十分な入学者が多く、その不足を英語の特別クラスで補っているという<sup>(11)</sup>。中等教育では、大学に必要な英語力の習得を可能にするような英語教育を行うことも使命の一つである。

一方、スリランカの英語教育は、第2言語としての英語教育であると同時に、国際共通語としての英語教育でもある。話題として多数登場する数学と科学は国の発展には重要な領域である。その領域では、英語が世界の主要言語である<sup>(12)</sup>。また、国定のカリキュラムにも外国語科目は含まれていない。実際、第5分冊第1単元の欄外では、国内で使用される英語語彙 rest house との相違を意識して、国際英語における hotel の意味を説明している。

英語が国際共通語であるという認識は、話題の背景の取り扱い方にも表れている。全体的にイギリスを背景として話題を取り上げる傾向は強いが、近隣のアジア諸国やヨーロッパ諸国も多数登場している。その中には、スリランカと歴史的に関わりの深い国や民族性の点で共通する国、また、スリランカが関心を寄せる国が含まれている。日本は後者に該当し、シリーズの全文冊に登場する。

スリランカ人の留学先は、主に英語圏の国々である。その数は、留学者総数の75%近くを占め、上位2カ国のアメリカとイギリスが全体の60%近くを占める。また、ヨーロッパへの留学者も多い。その中で、日本への留学者は、アジアでは最も多く、世界でも第6番目に多い(ユネスコ文化統計年鑑1999 523)。渋谷は、日本への関心が高い理由として、仏教活動において関わりが深いこと、また、同じアジアの国で西欧諸国と肩を並べるほどの経済発展を遂げていること等を挙げている(278-97)。

しかし、日本の場合にはその文化が話題として取り上げられているが、特定の国や文化を話題にしている箇所は少ない。また、複数の国を取り上げる場合には、飛行機の時刻表や外国為替レートの一覧表等を用いて実践的な英語力の習得を意図した工夫が見られる。これは、英語学習を通して世界の文化を学ぶというより、英語力そのものの習得が重視されているからであろう。

日本の中等教育では、中学が平成14年度、高校が平成15年度から、新しい学習指導要領に基づいた英語教育が開始される。その指導要領が目安とする学習語彙数は中学：900語、高校英語Ⅰ：中学の900語+500語、高校英語Ⅱ：高校英語Ⅰの数+400語である。スリランカの場合には、各分冊の語彙表によれば、シリーズ5分冊で用いられる単語数の合計は約4,880語である。語彙表の接辞の項目を用いて形成される単語数を加えれば、さらにその数は増す。日本の英語教育が、英語によるコミュニケーション能力の向上を重視するのであれば、threshold levelの英語力について、また、語彙数の問題も含め、その英語力の習得を可能にする学習内容について、今一度検討する必要があるのではないだろうか。

## 謝 辞

Peradeniya大学の化学学科教授 Oliver Ileperuma氏に、市販されていない国定教科書の入手と教科書に登場する人名の民族性の確認をお願いし、著者の疑問点やシンハラ語の語義に関するご指導いただいた。多忙にもかかわらず、お骨折りいただいた同氏に心から感謝いたします。また、同氏を通じて、現地の学校教育の実情に関する情報を提供していただいた Pusha Prematileke先生にも心から感謝いたします。

## 注

(1) Araの説明に基づく。その他の文献を用いる場合には文中に明記する。

- (2) De Silva と Dharmadasa<sup>b</sup> の文献に基づく。その他の文献を用いる場合には文中に明記する。なお、78年と87年の憲法修正案は UNESCO の MOST Clearing House のサイトで参照できる。
- (3) 統計数値は DCS に基づく。
- (4) DCS の用法に従い、ここではイスラム系ではなく「ムーア系」という用語を用いた。
- (5) Fernando<sup>a</sup> は多くのスリランカ人にとって英語学習は外国語としての英語学習であると述べている。また、Ileperuma 氏の印象では、スリランカ人全体の英語力は、英語に堪能な者が25%、普通レベルが25%、英語力ゼロに近い者が残り50%である。
- (6) IBE の資料に基づく。ただし、文末に\*印のある箇所は Gampola の St. Joseph's Balika Maha Vidyalaya に勤務する Pushpa Prematilleke 先生から得た情報に基づく。その他の文献を用いる場合には文中に明記する。
- (7) 2000年11月4日付けの The Times of India Online によれば、大統領は、非公式に、ビジネスの分野における英語の需要に対応するため、翌年から全ての公立学校で優秀な生徒を対象に英語で授業を行う、と発言している。
- (8) 元来、詩と韻文で科学関連の話題を扱っているものは少ない。したがって、ここでは「詩・韻文」のセクションを除外した。
- (9) 英語の人名が流行した時期があったが、現在では国内の言語による命名が多い。シンハラ系の場合、占星術師に文字を選んでもらい、学識者にその文字を使った名前を依頼する慣習がある。また、その名前にはサンスクリット文学の登場人物の名前がよく用いられ、ミドル・ネームをもつ者が多いという。
- (10) Amma は、サンスクリット語であろうと思われる単語で、シンハラ系とタミル系の両方に用いられている。
- (11) Ileperuma 氏の情報による。
- (12) Fernando<sup>b</sup> (216-17) は、スリランカの大学では学問の領域別で要求される英語力が相違することに言及し、科学の領域で英語が重視されているのは、その領域では世界的に英語が主要言語であるからと説明している。

## 引用・参考文献

ユネスコ文化統計年鑑1999 原書房, 2000年4月25日。

渋谷利雄「IV現代の情勢 2日本との関係」『もっと知りたいスリランカ』杉本良男編, 弘文堂, 昭和60年10月10日。

杉本良雄「1風土と歴史 2民族と国家」『もっと知りたいスリランカ』杉本良男編, 弘文堂, 昭和60年10月10日。

Ara, S. "Sri Lanka." *The New Encyclopaedia Britannica: Macropaedia Knowledge in Depth*. 15th ed. Vol. 28. Chicago: Encyclopaedia Britannica, Inc., 1997.

De Silva, K. M. "COMING FULL CIRCLE: THE POLITICS OF LANGUAGE IN SRI LANKA, 1943-1996." *Ethnic Studies Report* Vol. XIV, No 1 (1996): 11-48.

Dharmadasa, K. N. O.<sup>a</sup> *Language, Religion, and Ethnic Assertiveness: The Growth of Sinhalese Nationalism in Sri Lanka*. Ann Arbor: The University of Michigan Press. 1993.

- -,<sup>b</sup> *NATIONAL LANGUAGE POLICY IN SRI LANKA 1956 TO 1996: THREE STUDIES IN ITS IMPLEMENTATION*. Occasional Papers. Kandy, Sri Lanka: International Centre for Ethnic Studies. 1996.

Fernando, Chitra.<sup>a</sup> "English as a problem and resource in Sri Lankan Universities." *English across Cultures Culture across English: A Reader in Cross-cultural Communication*. Ed. Ofelia Garcia and Ricardo Otheguy. Berlin · New York: Mouton de Gruyter. 1989.

- -,<sup>b</sup> "The Ideational Function of English in Sri Lanka." *South Asian English: Structure, Use, and Users*. Ed. Robert J. Baumgardner. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. 1996.

Lloyd, Marion. "Ban on English-language teaching haunts college students in Sri Lanka." *The Chronicle of Higher Education*. Washington, Oct. 2, 1998.

Karunasinghe, A. and K. W. Ganasundara. "Sri Lanka 'Curriculum design and implementation for upper primary and general secondary education.'" Country report on curriculum development presented at the

- Sub-Regional Course on Curriculum Development. New Delhi, 9-17 March 1999.  
(UNESCO International Bureau of Education [IBE], Databanks.  
<<http://www.ibe.unesco.org/International/Databanks/Dossiers/mainfram.htm>> 01/03/30.)
- Mosback, Gerald. "National syllabus and textbook design on communicative principles--'English Every Day.'" *ELT Journal* Vol. 44/1 (1990): 18-24.
- Official Web Site of the Government of Sri Lanka [OWS]. "The Constitution of the Republic of Sri Lanka Bill." <<http://www.priu.gov.lk/Cons/Constitution.html>> 01/08/01.
- Department of Census and Statistics, Sri Lanka [DCS]. "Table 2. 12 Population by ethnic group, census years," "Table 2. 14 Percentage distribution of population by ethnic group and district, Census 1981," "Table 24. 1 Number of books published (titles and copies) by language (3): 1992-1996," "Table 24. 5 Number of newspapers in circulation, 1992-1997," and "Educational attainment of the population (30 yrs. and over)." <<http://www.lk/census>> 01/08/17.
- UNESCO: International Bureau of Education [IBE]. "Sri Lanka." Databanks, The Country Dossiers, Profiles. <<http://www.ibe.unesco.org/International/Databanks/Dossiers/mainfra.htm>> 01/03/30.
- UNESCO: Education for All [EFA]. The EFA 2000 Assessment, Sri Lanka. Country Reports. <<http://www2.unesco.org/wef/countryreports/sri-lanka/rapport-1.html>> 01/02/08.